「異常気象で読み解く現代史」

田家　康　著
日本経済新聞出版社，2016年4月
336頁，1,800円（本体価格）
ISBN 978-4-532-16987-9

この本は，20世紀初頭から現代にかけて起きた気候変動とその背景に隠された人為影響，およびそれに対する人類の対応を，実際のデータと豊富な文献を使って解説したものである．著者は，農林中金総合研究所客員研究員，日本気象予報士会東京支部長であり，気候変動と社会との関係の専門家である．これまでも「気候文明史」，「世界史を変えた異常気象」などの著書がある．本書は，20世紀以降の気候変動と人間活動との関係について，それぞれ異なった以下の5つのエピソードからなっている．

第Ⅰ章　大平原を襲ったダストボウル―アメリカの環境破壊

第Ⅱ章　毛沢東が起こした大飢饉―大躍進政策の「三割天災，七割人災」

第Ⅲ章　「核の冬」という破局的な異常気象―米ソの軍拡競争

第Ⅳ章　平成のコメ騒動―1993年冷夏

第Ⅴ章　地球温暖化論の登場―IPCCへの長い道程

第Ⅰ章のダストボウルとは1930年代にアメリカで多発した大規模な砂塵嵐のことである．それには人間活動の気候への影響が原因している．それまでのアメリカ経済の成り行きと，それによる農業の変化とダストボウルの発生，そしてその後の政府の対応について考証されている．人間と気候変化とのつながり，つまり「経済や農業などの人間活動と政策」が気候に及ぼす影響についての鋭い考察となっている．なお，ダストボウルは気象学の発展にとっても大きな影響を与えている．米国ではこの対策のため，1935年から米国気象局とマサチューセッツ工科大学の共同による5日予報の研究が始まった．そして，それがロスビーによる長波（ロスビー波）の発見につながっていったことが知られている．

第Ⅱ章は1960年前後に起こった，中国での大飢饉をテーマにしている．これによる死亡者数は1500万人から4500万人と推定されており，歴史上の災害の中で最も悲惨なものとされている．当時中国政府は，この原因を「三年自然災害」という異常気象のせいにした．これを気候データを含むさまざまな資料を用いて検証し，当時の権力闘争の内実とともに，中国国内で何が起こっていたのかに迫っている．これは現代政治史としても読み応えがある．

第Ⅲ章は，キューバ危機に端を発した核戦争の恐怖をテーマとしている．若い人はキューバ危機といっても知らない人が多いかも知れない．しかし，昭和40年前後は世界各地で大気中の核実験が盛んに行われるとともに，日本でも日常的に放射能雨が話題となっていた．また核戦争で世界や日本が滅亡する映画も数多く作られたりして，評者が小学生の頃には核戦争の恐怖には現実感があった．当初核戦争は，報復も含めてパワーゲームとして相手国を破壊することが目的だった．ところが気候研究の結果，「核兵器の使用は地球規模の異常気象を引き起こして，相手国だけでなく自国にも甚大な被害をもたらす」ことが知られるようになり，現在ではそれが核戦争の抑止力の一つとなっている．本書では，これがどんな研究によってどのようにして広く理解されていったかという経緯を，キューバ危機の成り行きから当時の気候研究まで丁寧に追いながら紡いでいる．

第Ⅳ章は，平成の米騒動である．これは覚えておられる方も多かろう．ピナトゥボ火山噴火の影響と思われる1993年の冷夏によって米不足が起き，政府によるタイ米の緊急輸入が行われたものの，結局日本でのタイ米の消費は芳しくなかった．その際の冷夏の原因，長期予報の見通しの変化，および政府のコメ不足に対する対応と政策の推移を改めて分析して考察している．

第Ⅴ章は，現在もその原因や対策に大きな議論を呼んでいる地球温暖化問題の経緯である．この本によると，太陽放射と地球の気温と関係の科学的な研究は，19世紀初めのフーリエから始まりチンダルによって引き継がれた．これが過去気候の研究者の目に止まり，地球軌道と気温との関係が研究されるようになった．そして，19世紀末に温室効果を起こす大気成分として二酸化炭素の影響を唱えたのがアレニウスである．この温室効果が，その後時代ごとの気候研究あるいは過去気候研究とどう関係し，それをその時代のマスコミや世の中がどう評価し，それが最終的に地球温暖化問題となって，IPCCや気候変動枠組み条約とどのようにして結びつくようになったかを説明している．これは本書のエピローグにもあるように，「地球温暖化論

© 2016　日本気象学会

の長く曲がりくねった歴史」をひもとくこととなっている．

この本のどのテーマも，そのテーマとなっている大気現象がどんなもので，それが社会や政治とどのように関わっていったかを分析している．この本では，その時点での科学的な見解や政策が時間の経緯に沿って出典を挙げて整理されており，その結果，これまで行われてきたいろいろな議論について，テーマごとに一本の筋を通した歴史考証となっている．その整理された内容には迫力と説得力がある．異常気象が現代においてどのように人間や政治に影響を与えてきたのかを，ひとまとめに理解するのに好適な本といえる．

（気象庁環境気象管理官　堤　之智）